

## 登山のような富士山漢詩の研究

李 杰 玲

「日本人でないあなたが、なぜ富士山についての研究をするのか」とよく聞かれる。思い出すのは、私が富士山に興味を持った約一〇年前のことである。

私は中国で日本語を勉強し始め、富士山に関心を持ち始めた頃であった。「山」という漢字は、日本語で常に「やま」と読んでいるが、「富士山」の「山」は「やま」ではなく、「さん」という敬称と同じ発音であることに、深い興味を惹かれた。その時、富士山は日本での他の山と比べて、特別且つ人々に尊敬される山岳だという印象が残った。

富士山は日本文化において、どのような山なのか、という疑問を解明するために、日本語の勉強を続けるとともに、インターネットの記事や写真や教科書の挿絵など、富士山に関わる資料を収集した。中でも、富士山に関わる文学作品については特に注目してきた。

ちょうどその時、私は山岳の信仰と詩歌をテーマとして、博士論文を書いていた。私の研究は中国の山岳信仰から出発したが、富士山の信仰には中国の山岳信仰との共通点が多いことに気づき、両方の比較研究を考え始めた。二〇一一年に日本語を勉強するために大阪に滞在した機会を利用して、中国の図書館・資料館にはない富士山の研究論文や関連資料を多く入手できた。その頃の私は、富士山漢詩の研究にまだ着手しておらず、具体的な計画もまだなかった。しかし、富士山についての研究をよりよく知るために、ありとあらゆる資料をコピーしたり、

写真を撮ったりした。日本にある富士山関連資料は極めて膨大で、宗教や美術、文学など多岐にわたって富士山の姿を見つけることができた。

二〇一三年六月初旬、私は信州大学主催の東アジア名山文化研究会で発表した後、信州大学の案内で、研究会に参加した中国、韓国及び日本の研究員とともに、富士山を見学に行った。バスの窓から富士山の姿が見えたとき、研究員たちは揃って歓呼した。富士山を見たことがない私にとって、常に文学作品の中にあつた富士山は、突然、雪蓮花のように目の前に浮かび上がったのだ。今でもそのイメージは忘れられない。六月は富士山の山開きの前なので、富士山に登ることはできず、山麓で富士山を仰ぎ見るだけであつたが、将来いつか山頂まで登るといふ思いを心に秘め、富士山についての研究を決意した。

二〇一六年から二〇一九年にかけて、私は日本語教科書から見る富士山のイメージや富士山の信仰、更には江戸時代の富士山漢詩など、三点の論文を中国の学術誌で発表した。それに加えて、二〇一九年一月二四日、日本近代文学会、昭和文学会及び日本社会文学会合同国際研究集会で、私は富士山の漢詩と中国唐代の「詩聖」と称される詩人杜甫の名作「望岳」という五言詩について、発表した。もともと二〇一九年二月に、富士山に関しての数年の研究成果を集めた『富士山漢詩研究』という単著を黄山書社より刊行する予定であつたが、日文研に着任した後、図書館の富士山資料を調査したり、図書館の富士山古写真展示を見学したりした結果、新しい資料を見つけたため、原稿を再度修正し、出版を二〇二〇年春に延ばすことになった。

富士山と漢詩の繋がりには長い歴史がある。日本人は飛鳥時代、奈良時代の頃より、漢詩を作り始め、平安初期に於いて、隆盛期を迎え、江戸時代に入り漢詩の実を結んだ。それに応じて、富士山の漢詩が江戸時代では、頂点に至つた。柴野栗山の「詠富士山」などの代表作は現

在まで広く知られている（高柳光寿著『富士の文学』名著出版、一九七三年）。

富士山の漢詩を読むと、中国の伝統文化との関係を見逃すことができない。例えば、『竹取物語』から見れば、富士山の不老不死信仰は悠久の歴史があり、道教の神仙思想は富士山の漢詩にも影響を与えた。神仙思想というのは、凡人は修行を通じて、生老病死を越えて、永遠の命と神通力を持つというものである。従って、日本人の詩人によって書かれた富士山の漢詩には、不老不死の神仙思想が反映されていることが多く、特に山頂は神仙の場所と見なされ、『玉芙蓉』にたとえられてロマンチックに描かれている。他にも、富士山にまつわる物語が多く漢詩には取り入れられており、豊かな世界観や構想を形作っている。

ところで、二〇〇七年、富士山と中国の泰山は「友好山」になった。東アジアの二名山を比較することで、まだまだ多くの新しい研究が生まれると信じている。泰山は中国で最も有名な五つの霊山、五岳の筆頭で、一九八七年世界遺産に登録された。古今東西の泰山詩は約二万点がある（袁愛国編『全泰山詩』泰山出版社、二〇一一年）。富士山の魅力は、中国の泰山の魅力に通ずるであろうか、と私は数年前、富士山の本を読んだあとに、このような疑問を持った。満足する解答は現在もまだ見つからない。それでもなお、嬉しいことは、富士山漢詩の研究を初めとし、日本文学への理解が一步一步深くなることだ。富士山は中国の文学、道教、絵画と密接な関係がある。私は富士山の本を書いている途中、富士山は鏡のように、日本の文化、日本人の思想や審美感だけではなく、中国の文化をも映しているように感じた。富士山を思い浮かべると親近感が心から湧いてくる。特に、日本人が漢詩を用いて、富士山を詠じるのは、中国人の私から見れば、親近感が湧くだけではなく、とても理解しやすい。ちなみに、私は広州にいた時、富士山を想像しながら、漢詩を書いた。その詩は左記の通りである。

遙想富岳 富岳を遙かに思う

富士峰頭傲雪高、富士の峰頭は雪に負けず、高く聳えている  
 扶桑海上美名遙。扶桑の美名は遙かに遠い海上の国でも伝わる  
 初看白蓮點碧空、初見で白蓮のような富士山は青空を点綴する  
 恍若岱宗披玉袍。さながら岱宗みたいに玉の袍をはおっている

富士山は日本だけではなく、世界にも名高い山ということは言うまでもない、山頂の雪は夏でも融けない、それは富士山の清秀かつ俗に染まらない様子の象徴でしょうか、まるで白いドレスを着る岱宗のようでしょうか。

日本では千年以上の長さを経て、富士山に関する数え切れないほど多くの漢詩が詠まれた。霊山としての富士山は人間のように思考できるのではないかと私はしばしば思う。それについて、富士山自身は一言も言わない。詩人たちは富士山の代わりに、さまざまな感想を表し、それらは本当に興味をそそる。一方、富士山は詩人の作品をどう思うのだろうか、古今の詩人と同じ感想を持つのであろうか、それは永遠の謎のように、私の心の中に時々響いている。その響きとともに、富士山についての研究をはじめとし、日本文学の研究を続けたいと考えている。

数年間断続的に富士山にまつわる論文やレポートを書いているが、時々、様々な事情で、研究を続けることが難しくなる。一番の難関は資料が足りないということだ。中国では、富士山関連の資料が少なく、日本の論文、図書、雑誌や博士論文などが検索できるデータベース「CNKI」を利用できないために、先行研究は数点の論文だけであるのに対し、日本側の富士山

漢詩研究は多い。富士山漢詩の特徴（久保田淳著『富士山の文学』理想社、二〇〇四年）や漢詩における富士山のイメージ（上垣外憲一著『富士山―聖と美の山』中央公論新社、一九八二年）や江戸時代の政治の中心地と富士山漢詩との関係（池澤一郎著「漢詩に詠まれた富士山―京儒の場」『国文学解釈と教材の研究』四九巻二号、八八―九二頁）などの論説が挙げられる。このような多くの研究成果を前にすると、私は良い研究を出来るかどうか不安に思い緊張してしまふ。加えて、富士山に関する古典資料は変体仮名で書かれており、読みづらい。例えば奈良絵巻『富士人穴草子』などは今の私にはなかなか読み取ることができない。とはいえ、諦めるという気持ちは全くない。私のカウンターパートである荒木浩先生のご厚意により、大学院生の石原知明さんと虞雪健さんから、変体仮名の古籍の解説について、いろいろと教えてもらっている。富士山に関する論文や資料を調べるだけではなく、江戸時代の文学を研究するのに必要なくずし字や江戸仮名について学ぶことで、富士山漢詩の研究を進めることができるのだ。富士山の研究は想像より難しい。

私は、外国人研究員の一人として、一步一步、富士山登山のように、富士山漢詩研究の本を書いている。本を出版した途端、ホッとするのではないかと人々は想像するかもしれない。しかし、著書の出版で私と富士山との関係が終わるわけではない。著書の原稿が完成しても、或いは著書が刊行されても、私にとっては「ゴール」ではない。私の研究は富士山に譬えると、頂上に向けて、まだまだ長い行程があると悟っている。それゆえ、日文研滞在中、私は新しい研究テーマへのチャレンジとして、江戸時代の百物語について研究する。とはいえ、百物語への関心を持ったのも、富士山のおかげと言える。二〇一五年、私は日本国際交流基金の「日本研究フェロー」として、当時一歳の長女とともに、東京学芸大学で一年間滞在研究していたと

き、私は富士山と関係がある『竹取物語』を娘に読み聞かせた、その後、娘は日本の絵本がだんだん好きになっていったので、私は娘と一緒に、富士山の絵本をはじめとする様々な絵本をほぼ毎日読んだ。そうしているうちに、江戸時代の百物語を題材にした絵本が多いということがわかった。私と百物語との本格的な出会いはここからである。娘は百物語についての絵本が気に入り、私に何度も読ませた。それによって、私は古典文学と現代生活の關係に気づき、いろいろな発想を持つことができた。

私は日本での暮らしや古典籍調査や資料収集など、何にでも深い興味を持ち、何でも研究資料になると信じている。江戸時代の百物語を研究しても、近世文学の範囲に留まらず、現代の日常生活との繋がりを重視しつつ、継続的に研究をしていきたい。

（泰山学院特別招聘研究員／蘇州大学研究員／国際日本文化研究センター外国人研究員）